**Voici le texte de *Butsudô* étudié avec Yoko Orimo dans les ateliers de l'Institut d'Etudes Bouddhiques en mai-juin 2015. Keisei-sanshoku** (La voie de l'Éveillé**)**est traduit en français dans le tome 4 de la Traduction intégrale du Shôbôgenzô (La Vraie Loi, Trésor de l'œil) de Yoko Orimo (Ed. Sully 2009). Le texte japonais ci-dessous est **à peu près** présenté en paragraphes comme dans le livre de Y. Orimo pour faciliter la recherche. Les I, II, III… correspondent aux \* placés entre certains paragraphes, les pages du livre sont précisées.

Ce texte est le 44ème de l'Ancienne Édition du Shôbôgenzô.

**正法眼蔵第四十四**

**仏道**

**I. p.118.**

**1.曹谿古仏、あるとき衆にしめしていはく、慧能より七仏にいたるまで四十祖あり。**

**この道を参究するに、七仏より慧能にいたるまで四十仏なり。仏々祖々を算数するには、かくのごとく算数するなり。かくのごとく算数すれば、七仏は七祖なり、三十三祖は三十三仏なり。曹谿の宗旨かくのごとし、これ正嫡の仏訓なり。正伝の嫡嗣のみ、この算数の法を正伝す。**

**2.釈迦牟尼仏より曹谿にいたるまで三十四祖あり。この仏祖相承、ともに迦葉の如来にあひたてまつれりしがごとく、如来の迦葉をえましますがごとし。釈迦牟尼仏の迦葉仏に参学しましますがごとく、師資ともに于今有在なり。このゆゑに、正法眼蔵まのあたり嫡々相乗しきたれり。仏法の正命、ただこの正伝のみなり。仏法はかくのごとく正伝するがゆえに附嘱の嫡々なり。しかあれば、仏道の功徳要機、もらさずそなはれり。西天より東地につたはれて十万八千里なり。在世より今日につたはれて二千餘載、**

**3.この道理を参学せざるともがら、みだりにあやまりていはく、仏祖正伝の正法眼蔵涅槃妙心、みだりにこれを禅宗と称す、祖師を禅祖とす、学者を禅師と号す。あるいは禅和子と称し、或(あるいは)禅家流の自称あり。これみな僻見を根本とせる枝葉なり。西天東地、従古至今、いまだ禅宗の称あらざるを、みだりに自称するは、仏道をやぶる魔なり、仏祖のまねかざる怨家なり。**

**II. p.119.**

**1.石門林間録に云く、菩提達磨、初自梁之魏。経行於嵩山之下、依杖於少林。面壁燕坐而已、非習禅也。久之人莫測其故。因以達磨為習禅。夫禅那諸行之一耳。何足以尽聖人。而当時之人、以之為史者、又従而伝於習禅之列、使与枯木死灰之徒為伍。雖然聖人非止於禅那、而亦不違禅那。如易出乎陰陽、而亦不違乎陰陽《菩提達磨、初め梁より魏に之く。嵩山の下に経行し、少林に倚杖す。面壁燕坐するのみなり、習禅には非ず。久しくなりて人其の故を測ること莫し。因て達磨を以て習禅と為す。夫れ禅那は、諸行の一つならくのみ。何ぞ以て聖人を尽すに足らん。而も当時の人、之を以てし、史を為す者、又従へて習禅の列に伝ね、枯木死灰の徒と伍ならしむ。然りと雖も、聖人は止だ禅那のみに非ず、而も亦た禅那に違せず。易の陰陽より出でて、而も亦た陰陽に違せざるが如し》。**

**2.第二十八祖と称するは、迦葉大士を初祖として称するなり。毘婆尸仏よりは第三十五祖なり。七仏および二十八代、かならずしも禅那をもて証道をつくすべからず。このゆゑに古先いはく、禅那は諸行のひとつならくのみ。なんぞもて聖人をつくすにたらん。この古先、いささか人をみきたれり、祖宗の堂奧にいれり、このゆゑにこの道あり。近日は大宋国の天下に難得なるべし、ありがたかるべし。**

**3.たとひ禅那なりとも、禅宗と称すべからず、いはんや禅那いまだ仏法の摠要にあらず。しかあるを、仏々正伝の大道を、ことさら禅宗と称するともがら、仏道は未夢見在なり、未夢聞在なり、未夢伝在なり。禅宗を自号するともがらにも、仏法あるらんと聴許することなかれ。禅宗の称、たれか称しきたる。諸仏諸師の禅宗と称する、いまだあらず。しるべし、禅宗の称は、魔波旬の称するなり。魔波旬の称を称しきたらんは、魔儻なるべし、仏祖の児孫にあらず。**

**III. P. 122.**

**1.世尊霊山百万衆前、拈優曇華瞬目、衆皆黙然。唯迦葉尊者、破顔微笑**

**《世尊、霊山百万衆の前にして、拈優曇華瞬目したまふに、衆皆黙然たり。唯迦葉尊者のみ破顔微笑せり》。世尊云、吾有正法眼蔵涅槃妙心、并以僧伽梨衣、附嘱摩訶迦葉《世尊云く、吾有正法眼蔵涅槃妙心、并びに僧伽梨を以 て摩訶迦葉に附嘱す》。**

**2.世尊の迦葉大士に附属しまします、吾有正法眼蔵涅槃妙心なり。このほかさらに吾有禅宗附嘱摩訶迦葉にあらず。并附僧伽梨衣といひて、并附禅宗といはず。しかあればすなはち、世尊在世に禅宗の称またくきこえず。**

**3.初祖その時二祖にしめしていはく、諸仏無上妙道、曠劫精勤、難行苦行、難忍能忍。豈以小徳小智、軽心慢心、欲冀真乗《諸仏無上の妙道は、曠劫に精勤して、難行苦行、難忍能忍なり。豈小徳小智、軽心慢心を以て、真乗を冀はんと欲せん》。**

**またいはく、諸仏法印、匪従人得《諸仏の法印は、人より得るに匪ず》。**

**またいはく、如来以正法眼蔵、附嘱迦葉大士《如来、正法眼蔵を以て、迦葉大士に附嘱す》。**

**4.いましめすところ、諸仏無上妙道、および正法眼蔵、ならびに諸仏法印なり。当時すべて禅宗と称することなし、禅宗と称すべき因縁きこえず。いまこの正法眼蔵は、揚眉瞬目して面授しきたる、身心骨髄をもてさづけきたる、身心骨髄に稟授しきたるなり。身先身後に伝授し稟受しきたり、心上心外に伝授し稟受するなり。**

**5.世尊迦葉の会に禅宗の称きこえず、初祖二祖の会に禅宗の称きこえず。五祖・六祖の会に禅宗の称きこえず、青原南嶽の会に禅宗の称きこえず。いづれのときより、たれ人の称しきたるとなし。学者のなかに、学者のかずにあらずして、ひそかに壊法・盗法のともがら、称しきたるならん。**

**6.仏祖いまだ聴許せざるを、晩学みだりに称するは、仏祖の家門を損ずるならん。又仏々祖々の法のほかに、さらに禅宗と称する法のあるににたり。もし仏祖の道のほかにあらんは、外道の法なるべし。すでに仏祖の児孫としては、仏祖の骨髄面目を参学すべし。仏祖の道に投ぜるなり。這裏を逃逝して、外道を参学すべからず。まれに人間の身心を保任せり、古来の辨道力なり。この恩力をうけて、あやまりて外道を資せん、仏祖を報恩するにあらず。**

**7.大宋の近代、天下の庸流、この妄称禅宗の名をききて、俗徒おほく禅宗と称し、達磨宗と称し、仏心宗と称する。妄称きほひ風聞して、仏道をみだらんとす。これは仏祖の大道かつていまだしらず、正法眼蔵ありとだにも見聞せず、信受せざるともがらの乱道なり。正法眼蔵をしらん、たれか仏道をあやまり称することあらん。**

**8.このゆゑに、南嶽山石頭庵無際大師、上堂示大衆言、吾之法門、先仏伝受、不論禅定精進、唯達仏之知見《南嶽山石頭庵無際大師、上堂して大衆に示して言く、吾が法門は、先仏より伝受せり。禅定・精進を論ぜず、唯仏の知見に達す》。**

**9.しるべし、七仏諸仏より正伝ある仏祖、かくのごとく道取するなり。ただ吾之法門、先仏伝受と道現成す。吾之禅宗、先仏伝受と道現成なし。禅定・精進の条々をわかず、仏之知見を唯達せしむ。精進禅定をきらはず、唯達せる仏之知見なり。これを吾有正法眼蔵附嘱とせり。**

**吾之は吾有なり、法門は正法なり。吾之吾有吾体は、汝得の附嘱なり。**

**10.無際大師は青原高祖の一子なり、ひとり道奧にいれり。曹谿古仏の剃髪の法子なり。しかあれば、曹谿古仏は祖なり、父なり。青原高祖は兄なり、師なり。仏道祖席の英雄は、ひとり石頭庵無際大師のみなり。**

**仏道の正伝、ただ無際のみ唯達なり。道現成の果々条々、みな古仏の不古なり、古仏の長今なり。これを正法眼蔵の眼晴とすべし、自余に批准すべからず。しらざるもの、江西大寂に比するは非なり。**

**11.しかあればしるべし、先仏伝受の仏道は、なほ禅定といはず、いはんや禅宗の称論ならんや。あきらかにしるべし、禅宗と称するは、あやまりのはなはだしきなり。つたなきともがら、有宗・空宗のごとくならんと思量して、宗の称なからんは、所学なきがとくなげくなり。仏道かくのごとくなるべからず、かつて禅宗と称せずと一定すべきなり。**

**12.しかあるに、近代の庸流、おろかにして古風をしらず、先仏の伝受なきやから、あやまりていはく、仏法のなかに五宗の門風ありといふ。これ自然の衰微なり。これを拯済する一箇半箇、いまだあらず。**

**IV. p. 127.**

**1.先師天童古仏、はじめてこれをあはれまんとす。人の運なり、法の達なり。先師古仏上堂、示衆に云く、如今箇々、祇管道雲門・法眼・潙仰・臨済・曹洞等、家風有別者、不是仏法也、不是祖師道也《如今箇々、雲門法眼潙仰・臨済・曹洞等、家風の別有ると祇管に道うは、仏法にあらず、祖師道にあらず》。**

**2.この道現成は、千載にあひがたし、先師ひとり道取す。十方にききがたし、円席ひとり聞取す。しかあれば、一千の雲水のなかに、聞著する耳朶なし、見取する眼晴なし。いはんや心を挙してきくあらんや、いはんや身処に聞著するあらんや。たとひ自己の渾身心に聞著する億万劫にありとも、先師の通身心を挙拈して、聞著し、証著し、信著し、脱落著するなかりき。**

**3.あはれむべし、大宋一国の十方、ともに先師をもて諸方の長老等に斉肩なりとおもへり。かくのごとくおもふともがらを、具眼なりとやせん、未具眼なりとやせん。またあるひは、先師をもて臨済・徳山に斉肩なりとおもへり。このともがらも、いまだ先師をみず、いまだ臨済にあはずといふべし。先師古仏を礼拝せざりしさきは、五宗の玄旨を参究せんと擬す。**

**4.先師古仏を礼拝せしよりのちは、あきらかに五宗の乱称なるむねをしりぬ。しかあればすなはち、大宋国の仏法さかりなりしときは、五宗の称なし。また五宗の称を挙揚して、家風をきこゆる古人いまだあらず。仏法の澆薄よりこのかた、みだりに五宗の称あるなり。これ人の参学おろかにして、辨道を親切にせざるによりてかくのごとし。**

**5.雲箇、水箇、心箇の参究を求覓せんは、切忌すらくは五家の乱称を記持することなかれ、五家の門風を記号することなかれ。いはんや三玄三要・四料簡・四照用・九帯等あらんや。いはんや三句・五位、十同真智あらんや。**

**6.釈迦老子の道、しかのごとくの小量ならず、しかのごとくを大量とせず、道現成せず、少林・曹谿にきこえず。あはれむべし、いま末代の不聞法の禿子等、その身心眼晴くらくしていふところなり。仏祖の児孫種子、かくのごとくの言語なかれ。仏祖の住持に、この狂言かつてきこゆることなし。**

**7.後来の阿師等、かつて仏道の全道をきかず、祖道の全靠なく、本分にくらきともがら、わづかに一両の少分に矜高して、かくのごとく宗称を立するなり。立宗称よりこのかたの小児子等は、本をたづぬべき道を学せざるによりて、いたづらに末にしたがふなり。慕古の志気なく、混俗の操行あり。俗なほ世俗にしたがふことをいやしとして、いましむるなり。**

**V. p. 130.**

**Récit.文王、太公望に問ひて曰く、君務挙賢、而不獲其功、世乱愈甚。以致危亡者何也《君務んで賢を挙ぐ。而も其の功を獲ず、世の乱れ愈甚し。以て危亡を致すは何ぞや》。**

**太公曰く、挙賢而不用、是以有挙賢之名也、無得賢之実也《賢を挙げて用ゐず、是を以て挙賢の名のみ有りて、得賢の実無きなり》。**

**文王曰く、其失安在《其の失安にか在る》。**

**太公曰く、其失在好用世俗之所誉、不得其真実《其の失好んで世俗の誉むる所を用ゐるに在り、其の真実を得ず》。**

**文王曰く、好用世俗之所誉者何也《好んで世俗の誉むる所を用ゐるは何ぞや》。**

**太公曰く、好聴世俗之所誉者、或以非賢為賢、或以非智為智、或以非忠為忠、或以非信為信。君以世俗所賢者為賢者、以世俗之所毀者為不肖。則多党者進、小党者退。是以群邪比周而蔽賢、忠臣死於無罪、邪臣挙誉以求爵位。是以世乱愈甚、故其国不免於危亡《好んで世俗の誉むる所を聴かば、或いは賢に非ざるを以て賢と為し、或いは賢に非ざるを以て智と為し、或いは忠に非ざるを以て忠と為し、或いは信に非ざるを以て信と為す。君、世俗の誉むる所の者を以て賢智なりと為し、世俗の毀る所の者を以て不肖と為す。則ち党多き者は進み、党少なき者は退く。是を以て群邪比周して賢を蔽ひ、忠臣は罪無きに死し、邪臣は挙誉を以て爵位を求む。是を以て世 の乱れ愈甚し、故に其の国危亡を免れず》。**

**1.俗なほその国その道の危亡することをなげく。仏法仏道の危亡せん、仏子かならずなげくべし。危亡のもとゐは、みだりに世俗にしたがふなり。世俗のほむるところをきく時は、真賢をうることなし。真賢をえんとおもはば、照後観前の智略あるべし。世俗のほむるところ、いまだかならずしも賢にあらず、聖にあらず。世俗のそしるところ、いまだかならずしも賢にあらず、聖にあらず。しかありといへども、賢にしてそしりをまねくと、偽にしてほまれあると、三察するところ、混ずべからず。賢をもちゐざらんは国の損なり、不肖をもちゐんは国のうらみなり。**

**2.いま五宗の称を立するは、世俗の混乱なり。この世俗にしたがふものは、おほしといへども、俗を俗としれる人すくなし。俗を化するを聖人とすべし、俗にしたがふは至愚なるべし。この俗にしたがはんともがら、いかでか仏正法をしらん、いかにしてか仏となり祖とならん。**

**七仏嫡々相承しきたれり。いかでか西天にある依文解義のともがら、五部を立するがごとくならん。しかあればしるべし、仏法の正命を正命とせる祖師は、五宗の家門あるとかつていはざるなり。仏道に五宗ありと学するは、七仏の正嗣にあらず。**

**VI. p. 132.**

**1.先師示衆に云く、近年祖師道廃、魔党畜生多。頻々挙五家門風、苦哉苦哉《近年、祖師道廃して、魔党畜生多し。頻々に五家の門風を挙す、苦哉苦哉》。**

**2.しかあれば、はかりしりぬ、西天二十八代、東地二十二祖、いまだ五宗の家門を開演せざるなり。祖師とある祖師は、みなかくのごとし。五宗を立して各々の宗旨ありと称するは、誑惑世間人のともがら、少聞薄解のたぐひなり。仏道におきて、各々の道を自立せば、仏道いかでか今日にいたらん。迦葉も自立すべし、阿難も自立すべし。もし自立する道理を正直とせば、仏法はやく西天に滅しなまし。**

**3.各々自立せん宗旨、たれかこれ慕古せん。各々に自立せん宗旨、だれか正邪を決択せん。正邪いまだ決択せずば、たれかこれを仏法なりとし、仏法にあらずとせん。この道理あきらめずば、仏道と称しがたし。**

**4.五宗の称は、各々祖師の現在に立せるにあらず。五宗の祖師と称する祖師、すでに円寂ののち、あるいは門下の庸流、まなこいまだあきらかならず、あしいまだあゆまざるもの、父にとはず、祖に違して、立称しきたるなり。そのむねあきらかなり、たれ人もしりぬべし。**

**VII. p. 134.**

**1.大潙山大円禅師は、百丈大智子なり。百丈と同時に潙山に在す。いまだ仏法を潙仰宗と称すべしといはず。百丈も、なんぢがときより潙山宗と称すべし、といはず。師と祖と称せず、しるべし、妄称といふことを。たとひ宗号をほしきままにすといふとも、あながちに仰山をもとむべからず。自称すべくは自称すべし。**

**2.自称すべからざるによりて、前来も自称せず、いまも自称なし。曹谿宗といはず、南嶽宗といはず、江西宗といはず、百丈宗といはず。潙山にいたりて曹谿にことなるべからず。曹谿よりもすぐるべからず、曹谿におよぶべからず。**

**3.大潙の道取する一言半句、かならずしも仰山と一条拄杖両人舁せず。宗の称を立せんとき、潙山宗といふべし、大潙宗といふべし、潙仰宗と称すべき道理いまだあらず。潙仰宗と称すべくは、両位の尊宿の在世に称すべし。在世に称すべからんを称せざらんは、なにのさはりによりてか称せざらん。すでに両位の在世に称せざるを、父祖の道に違して潙仰宗と称するは、不孝の児孫なり。これ大潙禅師の本懐にあらず、仰山老人の素意にあらず。正師の正伝なし、邪党の邪称なることあきらけし。これを尽十方界に風聞することなかれ。**

**VIII. p. 135.**

**1.慧照大師は、講経の家門をなげすてて、黄檗の門人となれり。黄檗の棒を喫すること三番、あはせて六十拄杖なり。大愚のところに参じて省悟せり。ちなみに鎮州臨済院に住せり。黄檗のこころを究尽せずといへども、相承の仏法を臨済宗となづくべしといふ一句の道取なし、半句の道取なし。竪拳せず、拈払せず。しかあるを、門人のなかの庸流、たちまちに父業をまぼらず、仏法をまぼらず、あやまりて臨済宗の称を立す。慧照大師の平生に結搆せん、なほ曩祖の道に違せば、その称を立せんこと、予議あるべし。**

**2. Dialogue.**

**いはんや、臨済将示滅、嘱三聖慧然禅師云、吾遷化後、不得滅却吾正法眼蔵《臨済将に滅を示さんとするに、三聖慧然禅師に嘱して云く、吾遷化の後、吾が正法眼蔵を滅却すること得ざれ》。**

**慧然云く、争敢滅却襲う正法眼蔵《争でか敢へて和尚の正法眼蔵を滅却せん》。**

**臨済云く、忽有人間汝、作麼生対《忽ちに人有つて汝に問はんに、作麼生か対せん》。**

**慧然便喝《慧然便ち喝す》。**

**臨済云く、誰知吾正法眼蔵、向瞎驢辺滅却《誰か知らん吾が正法眼蔵、遮瞎驢辺に向つて滅却せんことを》。**

**かくのごとく師資道取するところなり。臨済いまだ、吾禅宗を滅却することえざれ、といはず、吾臨済宗を滅却することをえざれ、といはず、吾宗を滅却することえざれ、といはず、ただ吾正法眼蔵を滅却することえざれ、といふ。あきらかにしるべし、仏祖正伝の大道を禅宗と称すべからずといふこと、臨済宗と称すべからずといふことを。**

**3.さらに禅宗と称すること、ゆめゆめあるべからず。たとひ滅却は正法眼蔵の理象なりとも、かくのごとく附嘱するなり。向遮瞎驢辺の滅却、まことに附嘱の誰知なり。臨済門下には、ただ三聖のみなり。法兄法弟におよぼし、一列せしむべからず。まさに明窓下按排なり。臨済・三聖の因縁は仏祖なり。今日臨済の附嘱は、昔日霊山の附嘱なり。しかあれば、臨済宗と称すべからざる道理あきらけし。**

**IX. p. 137.**

**1.雲門山匡真大師、そのかみは陳尊宿に学す、黄檗の児孫なりぬべし、のちに雪峰に嗣す。この師、また正法眼蔵を雲門宗と称すべしといはず。門人また潙仰・臨済の妄称を妄称としらず、雲門宗の称を新立せり。**

**2.匡真大師の宗旨、もし立宗の称をこころざさば、仏法の身心なりとゆるしがたからん。いま宗の称を称するときは、たとへば、帝者を匹夫と称せんがごとし。清涼院大法眼禅師は、地蔵院の嫡嗣なり。玄沙院の法孫なり。宗旨あり、あやまりなし。大法眼は署する師号なり。これを正法眼蔵の号として法眼宗の称を立すべしといへることを、千言のなかに一言なし、万句のうちに一句なし。しかあるを、門人また法眼宗の称を立す。法眼もしいまを化せば、いまの妄称、法眼宗の道をけづるべし。法眼禅師すでにゆきて、この患をすくふ人なし。たとへ千万年ののちなりとも、法眼禅師に孝せん人は、この法眼宗の称を称とすることなかれ。これ本孝大法眼禅師なり。おほよそ雲門・法眼等は、青原高祖の遠孫なり、道骨つたはれ、法髄つたはれり。**

**X. p. 138.**

**1.高祖悟本大師は雲巌に嗣法す、雲巌は薬山大師の正嫡なり、薬山は石頭大師の正嫡なり、石頭大師は青原高祖の一子なり。斉肩の二三あらず、道業ひとり正伝せり。仏道の正命なほ東地にのこれるは、石頭大師もらさず正伝せしちからなり。**

**2.青原高祖は、曹谿古仏の同時に、曹谿の化儀を青原に化儀せり。在世に出世せしめて、出世を一世に見聞するは、正嫡のうへの正嫡なるべし、高祖のなかの高祖なるべし。雄参学、雌出世にあらず。そのときの斉肩、いま抜群なり。学者ことにしるべきところなり。**

**3.曹谿古仏、ちなみに現般涅槃をもて人天を化せし席末に、石頭すすみて所依の師を請ず。古仏ちなみに尋思去としめして尋譲去といはず。しかあればすなはち、古仏の正法眼蔵、ひとり青原高祖の正伝なり。たとひ同得道の神足をゆるすとも、高祖はなほ正神足の独歩なり。曹谿古仏、すでに青原を、わが子を子ならしむ。子の父の、父の父とある、得髄あきらかなり。祖宗の正嗣なることあきらかなり。**

**4.洞山大師、まさに青原四世の嫡嗣として、正法眼蔵を正伝し、涅槃妙心開眼す。このほかさらに別伝なし、別宗なし。大師かつて曹洞宗と称すべしと示衆する拳頭なし、瞬目なし。また門人のなかに庸流まじはらざれば、洞山宗と称する門人なし、いはんや曹洞宗といはんや。**

**5.曹洞宗の称は、曹山を称し、くわうるならん。もししかあらば、雲居・同安もくはへ、のすべきなり。雲居は人中天上の導師なり、曹山よりも尊崇なり。はかりしりぬ、この曹洞の称は、傍輩の臭皮袋、おのれに斉肩ならんとて、曹洞宗の称を称するなり。まことに、白日あきらかなれど も、浮雲しもをおほふがごとし。**

**XI. p. 140.**

**1.先師いはく、いま諸方獅子の座にのぼるものおほし、人天の師とあるものおほしといへども、知得仏法道理箇渾無《仏法の道理を知得する箇渾て無し》。**

**2.このゆゑに、きほうて五宗の宗を立し、あやまりて言句の句にとどこほれるは、真箇に仏祖の怨家なり。あるいは黄龍の南禅師の一派を称して、黄龍宗と称しきたれりといへども、その派とほからず、あやまりをしるべし。およそ世尊現在、かつて仏宗と称しましまさず、**

**3.霊山宗と称せず、祇園宗といはず、我心宗といはず、仏心宗といはず。いづれの仏語にか仏心宗と称する。いまの人、なにをもてか仏心宗と称する。世尊なにのゆゑにか、あながちに心を宗と称せん。宗なにによりてか、かならずしも心ならん。もし仏心宗あらば仏身宗あるべし、仏眼宗あるべし。仏耳宗あるべし、仏鼻舌等宗あるべし。仏髄宗・仏骨宗・仏脚宗・仏国宗等あるべし。いまこれなし、しるべし、仏心宗の称は偽称なりといふこ と。**

**4.釈迦牟尼仏、ひろく十方仏土中の諸法実相を挙拈し、十方仏土中をとくとき、十方仏土のなかに、いづれの宗を建立せりととかず。宗の称もし仏祖の法ならば、仏国にあるべし、仏国にあらば仏説すべし。仏不説なり、しりぬ、仏国の調度にあらず。祖道せず、しりぬ、祖域の家具にあらずといふことを。ただ人にわらはるるのみにあらざらん。諸仏のために制禁せられん、また自己のためにわらはれん。つつしんで宗称することなかれ、仏法に五家ありといふことなかれ。**

**5.後来智聰といふ小児子ありて、祖師の一道両道をひろひあつめて、五家の宗派といひ、人天眼目となづく。人これをわきまへず、初心晩学のやから、まこととおもひて、衣領にかくしもてるもあり。人天眼目にあらず、人天の眼目をくらますなり。いかでか瞎却正法眼蔵の功徳あらん。**

**6.かの人天眼目は、智聰上座、淳煕戊申十二月のころ、天台山万年寺にして編集せり。後来の所作なりとも、道是あらば聴許すべし。これは狂乱なり、愚暗なり。参学眼なし、行脚眼なし、いはんや見仏祖眼あらんや。**

**もちゐるべからず。智聰といふべからず、愚蒙といふべし。その人をしらず、人にあはざるが、言句をあつめて、その人とある人の言句をひろはず、しりぬ、人をしらずといふことを。**

**7.震旦国の教学のともがら宗称するは、斉肩の彼々あるによりてなり。いま仏祖正法眼蔵の附嘱嫡々せり、斉肩あるべからず、混ずべき彼々なし。かくのごとくなるに、いまの杜撰長老等、みだりに宗称をもはらする、自専のくはだて、仏道をおそれず。仏道はなんぢが仏道にあらず、諸仏祖の仏道なり、仏道の仏道なり。**

**XII. p.143.**

**太公、文王に謂いて云く、天下者、非一人之天下、天下之天下也《天下は一人の天下に非ず、天下の天下なり》。**

**1.しかあれば、俗士なほこれ智あり、この道あり。仏祖屋裏児、みだりに仏祖の大道を、ほしきままに愚蒙にしたがへて、立宗の自称することなかれ。おほきなるをかしなり。仏道人にあらず。宗称すべくは、世尊みづから称しましますべし。世尊すでに自称しましまさず、児孫として、なにゆゑにか滅後に称することあらん。たれ人か世尊よりも善巧ならん。**

**善巧あらずば、その益なからん。もしまた仏祖去来の道に違背して、自宗を自立せば、たれかなんぢが宗を宗とする仏児孫あらん。照古観今の参学すべし、みだりなることなかれ。**

**3.世尊在世に一毫もたがはざらんとする、なほ百千万分の一分におよばざることをうれへ、およべるをよろこび、違せざらんとねがふを、遺弟の畜念とせるのみなり。これをもて、多生の値遇奉覲をちぎるべし、これをもて、多生の見仏聞法をねがふべし。**

**4.ことさら世尊在世の化儀にそむきて、宗の称を立せん、如来の弟子にあらず、祖師の児孫にあらず。重逆よりもおもし。たちまちに如来の無上菩提をおもくせず、自宗を自専する、前来を軽忽し、前来をそむくなり、前来をしらずといふべし。世尊在日の功徳を信ぜざるなり。かれらが屋裏に仏法あるべからず。**

**5.しかあればすなはち、学仏の道業を正伝せんには、宗の称を見聞すべからず。仏々祖々、附属し正伝するは、正法眼蔵無上菩提なり。仏祖所有の法は、みな仏附嘱しきたれり、さらに剰法のあらたなるあらず。この道理、すなはち法骨道髄なり。**

**正法眼蔵第四十四仏道
    爾時寛元元年癸卯九月十六日、在越州吉田県吉峰寺示衆。
　　同癸卯十月廿三日夜三更、書写之。懐弉
　　同乙巳六月廿六日、又交合、奥書云処也**